

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

The Tendency of Student's idea about Active Play in a Department of Childhood Studies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山内, 弘和 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1134

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



保育・教職課程所属の学生が考える 運動遊びの傾向について

小山内 弘 和

I. はじめに

これまで、子どもの体力レベルの低下は、大きな問題として取り上げられてきた。中村は、1980年代から子どもの体力低下が生じていることとともに、「三間（時間、空間、仲間）」の減少が子どもの身体的な活動を抑制していることを指摘している¹⁾。富本は、幼児期の運動遊びの重要性を指摘するとともに、現在の遊びが屋外から屋内へ変容していることを報告している²⁾。

これらの子どもを取り巻く環境変化に対する危機感から、さまざまな試みが行われてきている^{1,3)}。中村は、人間の基本的な動きと遊び等の動きから、36の基本的な動きを抽出し、その重要性を述べている¹⁾。36の基本の動きは、バランス系（9種類）、移動系（9種類）、操作系（18種類）の動作から構成されており、幼児からでも行うことが可能な活動を紹介している。文部科学省は、基本的運動能力の低下へ歯止めを掛けるため、平成24年に幼児期運動指針を発表した³⁾。幼児期運動指針においては、幼児の運動における現状、意義や在り方等とともに、幼児の身体活動の必要時間、年齢に応じた幼児期に獲得しておきたい動き等が示された¹⁾。幼児期に獲得しておきたい動きは、中村同様、体のバランスを取る動き、体を移動する動き、用具などを操作する動きに属する内容が挙げられている。また、幼児期運動指針ガイドブックや普及用パンフレットを作成することで普及に努めてきた⁴⁾。近年では、子どもの体力レベルが回復傾向にある。しかし、体力レベルが高かったと言われる1980年代と比較すると、その数値は未だに低い値を示しており、改善されたとは言い難い⁵⁾。

子どもにおける身体活動が重要である事は周知の事実である。幼児期運動指針では、『幼稚園、保育所などに限らず、家庭や地域での活動も含めた一日の生活全体の身体活動を合わせて、幼児が様々な遊びを中心に、合計60分以上、楽しく体を動かすことが望ましい。』とされている³⁾。しかし、現代社会においては、遊びの内容の変容とともに、上述の通り「三間」が減少し運動遊び自体を確保することが難しくなっている。一方、幼児期の多くの子ども達は、保育園や幼稚園に所属し、一定時間をその環境で過ごしている。これらの環境は、減少しているといわれる「三間」を確保することが可能であり、子ども達の運動遊びにおいて重要な場となると考えられる。

このことから、子どもの運動遊びにとって優良な環境がある幼稚園や保育所において、その機会を作り出すことができる保育者の意識が重要になってくるものと思われる。

しかし、現在、保育・教職課程に所属する学生は、幼児期の体力レベルの低下や「三間」の減少といった時代を過ごしてきている。そのため、運動遊びに対してどのような発想を持っているのかという疑問が生じる。また、学生は保育・教職希望であるものの、これまでの運動経験においては、多くの学生が運動を「する側」であり、運動を「させる側」を経験していないと思われる。そのため、運動を「させる側」、すなわち運動遊びの指導者としての意識を有しているとは考えにくい。

そこで、本研究では、保育・教職課程に所属し、保育者を希望する本学こども学科1年生が記入した運動遊びの資料を基に、動きや情報を抽出・分析することで、学生が考える運動遊びの傾向を検討することを目的とした。

II. 方法

1. 対象

本研究では、運動遊びの資料を作成し提出された、本学こども学科1年生155名（155例）の資料分析の対象とした。

2. 運動遊びの資料作成について

運動遊びの資料の記入は、授業時間外の課題として提示し、授業終了時に配布し、後日、回収した。記入内容は、タイトル、ねらい、内容とした。運動あそびの内容の記入においては、授業内での活動等にこだわらず、自分の体験や記憶にあるもの、調べたものやオリジナルのものなどを記入するよう指示した。記入方法については、記入例を示すとともに注意事項を伝えた。さらに、他の人が資料を閲覧した際に、実践できるような記入を心がけるように指導した。

3. 分析

運動遊びの資料の分析は、資料に記入された内容から、参加人数（1名または複数）、使用する物品の有無、内容に含まれる動きの3項目を抽出した。内容に含まれる動きについては、中村が考案した36の基本的な動き¹⁾（表1）を基に、運動遊びの資料に明記されたもの、または内容から明らかなもののみを、全て抽出した。本研究においては、筆者が3項目の抽出を行った。なお、動きの抽出においては、同一の内容の運動遊びでは、特別な記入がない限り同一の動きを抽出するよう調整を行った。

表1 分析対象とした36の動きの内容(中村)

バランス系の動作 (Stability movement)		移動系の動作 (Locomotive movement)		操作系の動作 (Manipulative movement)	
1	起きる	10	歩く	19	持つ
2	立つ	11	走る	20	支える
3	回る	12	はねる	21	運ぶ
4	組む	13	滑る	22	押す
5	渡る	14	跳ぶ	23	押さえる
6	ぶら下がる	15	登る	24	こぐ
7	逆立ちする	16	はう	25	つかむ
8	乗る	17	くぐる	26	当てる
9	浮く	18	泳ぐ	27	捕る
				28	渡す
				29	積む
				30	掘る
				31	振る
				32	投げる
				33	打つ
				34	蹴る
				35	引く
				36	倒す

参加人数と使用する物品の有無については、その例数を求めた。また、参加人数と使用する物品については、参加人数毎の使用する物品の有無についても検討した。

動きに関しては、抽出されたそれぞれの動きの例数を求めた。また、運動遊びの資料に含まれる動きの種類数を求めるとともに、動きの延べ数を求め、延べ数当たりの割合を算出した。さらに、抽出された動きの延べ数を「バランス系」、「移動系」、「操作系」に分類し、それぞれの延べ数と延べ数当たりの割合についても検討した。

参加人数と使用する物品の有無については、 χ^2 二乗検定 (SPSS 10.0 for Windows, IBM) を行い、 $p < 0.05$ をもって有意とした。

Ⅲ. 結果

表2は、運動遊びへの参加人数について示したものである。

表2 運動遊びへの参加人数

		例数 (例)	割合 (%)
参加人数	一人	13	8.4
	複数	142	91.6

表3 使用する物品の有無

		例数 (例)	割合 (%)
使用する物品	有	41	26.5
	無	114	73.5

表4 運動遊びへの参加人数と使用する物品の有無の関係

			使用する物品	
			有	無
参加人数	一人	例数 (例)	9	3
		割合 (%)	5.8	1.9
	複数	例数 (例)	34	109
		割合 (%)	21.9	70.3

 $p < 0.05$

運動遊びへの参加人数は、142例（91.6%）が複数での運動遊びであった。

表3は、使用する物品の有無について示したものである。

使用する物品の有無については、114例（73.5%）が物品を使用しない運動遊びであった。

表4は、運動遊びへの参加人数と物品の有無の関係を示したものである。

運動遊びへの参加人数と物品の有無の関係では、参加人数が複数で使用する物品が無い運動遊びが109例（70.3%）で最も多く、参加人数が1人で使用する物品が無い運動遊びが3例（1.9%）と最も少なかった。参加人数と使用する物品の有無に関しては有意な関係が見られた（ $p < 0.05$ ）。

表5は、資料内に記入された動きの種類の数について示したものである。

記入された動きの種類数は、1個が78例（50.3%）で最も多くみられた。さらに、2個が46例（29.7%）であり、1または2個の種類数の記入が80%であった。記入されていた動きの延べ数は264例であった。

表6は、36の動きそれぞれの例数と延べ数（264例）当たりの割合について示したものである。

動きの例数は、「走る」が102例（65.8%）で最も多くの学生が記入していた。ついで、「つかむ」が28例（18.1%）であった。また、「歩く」が25例（16.1%）であり、「走る」と「歩く」の移動系の2種類で80%以上であった。延べ数当たりの割合においても「走る」と「歩く」で48.1%であり、約半数を占めていた。また、「起きる」、「ぶら下がる」、「逆立ちする」、「乗る」、「浮く」、「滑る」、「はう」、「泳ぐ」、「こぐ」、「積む」、「掘る」、「倒す」の12の動きは、記入する学生がいなかった。なお、全ての動きが含まれていない「該当なし」が1例みられた。

表5 動きの種類の数(個)と延べ数(例)

動きの種類(個)	例数(例)	割合(%)	延べ数(例)
0	1	0.6	0
1	78	50.3	78
2	46	29.7	92
3	26	16.8	78
4	4	2.6	16
合計	155	100	264

表6 36の動きの例数(例)と延べ数当たりの割合(%)

動き		例数(例)	割合(%)	延べ数当たりの割合(%)	動き		例数(例)	割合(%)	延べ数当たりの割合(%)
走る	L	102	65.8	38.6	支える	M	1	0.6	0.4
つかむ	M	28	18.1	10.6	運ぶ	M	1	0.6	0.4
歩く	L	25	16.1	9.5	押さえる	M	1	0.6	0.4
捕る	M	13	8.4	4.9	渡す	M	1	0.6	0.4
投げる	M	13	8.4	4.9	起きる	S	0	—	—
引く	M	13	8.4	4.9	ぶら下がる	S	0	—	—
立つ	S	11	7.1	4.2	逆立ちする	S	0	—	—
はねる	L	10	6.5	3.8	乗る	S	0	—	—
当てる	M	9	5.8	3.4	浮く	S	0	—	—
蹴る	M	7	4.5	2.7	滑る	L	0	—	—
組む	S	5	3.2	1.9	はう	L	0	—	—
持つ	M	4	2.6	1.5	泳ぐ	L	0	—	—
跳ぶ	L	3	1.9	1.1	こぐ	M	0	—	—
登る	L	3	1.9	1.1	積む	M	0	—	—
くぐる	L	3	1.9	1.1	掘る	M	0	—	—
押す	M	3	1.9	1.1	倒す	M	0	—	—
回る	S	2	1.3	0.8	該当なし	—	1	0.6	—
渡る	S	2	1.3	0.8	延べ数		264		
振る	M	2	1.3	0.8					
打つ	M	2	1.3	0.8					

S：バランス系 (Stability movement)
L：移動系 (Locomotive movement)
M：操作系 (Manipulative movement)

表7 分類毎の動きの延べ数（例）と延べ数当たりの割合（％）

	述べ数（例）	延べ数当たりの割合（％）
バランス系	20	7.6
移動系	146	55.3
操作系	98	37.1
計	264	100

表7は、分類毎の動きの延べ数（例）と延べ数当たりの割合（％）を示したものである。

分類毎の動きの延べ数と延べ数当たりの割合は、移動系が146例（55.3％）で半数以上であった。バランス系は20例（7.6％）と最も少なかった。

IV. 考察

本研究では、保育・教職課程所属の本学こども学科1年生を対象に、記入された運動遊びの資料を分析することで、学生が考える運動遊びの傾向を検討することを目的とした。

運動遊びへの参加人数と使用する物品の有無については、参加人数が複数で物品を用いない運動遊びを記入する学生が約70％であった。このことは、運動遊びの資料を作成するに当たり、初めから集団を対象にしており、かつ、簡単に行えるものを選択していたと予想される。また、運動遊びの内容に含まれる動きの種類の数においても、1または2個が80％、運動遊びに含まれる動きについては、「走る」、「歩く」といった移動系の動きが多く見られた。活動内容としては、様々な鬼ごっこが数多く記入されており、年齢に大きな影響を受けない単純な動きの活動として「走る」、「歩く」といった移動系の運動遊びが多く記入されたものと思われる。これらのように、集団を対象に簡単、かつ、多くの対象年齢で可能なものを選択したことから、学生が運動遊びの資料を記入するに当たり、保育者としての視点を持って記入したものと推察される。また、運動遊びの資料の作成においては、個々が体験してきた運動遊びを記載したことが予想される。このことから、幼少期の運動遊びにおいては、仲間と「走る」、「歩く」と言った活動を数多く経験してきたことも伺われた。

柳田は、保育者が日常保育の中で重視している内容を幼稚園へアンケート調査し、運動遊びと5領域の項目との比較を行った結果、運動遊びの重要度が最も低かったと報告している⁶⁾。一方、外部体育指導員の導入率が高いことも示しており、運動遊びの重要性を理解しつつも、そう捉えられない矛盾も指摘している。学生が、授業の課題であるものの、保育者としての視点を持って作成したことは、保育現場での運動遊びの展開を想定して考えた結果であると思われる。現場で

は、責任ある様々な活動があるものの、子どもの発育・発達のためにも、記入した時の運動遊びに対する思いを大切にしたいと考える。

本学こども学科の「体育」の授業では、授業初回に、「運動遊びとは、運動と遊びに教育的な願いを込めて行うもの」であること、また、その運動遊びにおいて大切な事は、「色々な動きを取り入れた運動遊びをすることで身体的な能力を獲得していくこと」と指導している。学生が記入した運動遊びの資料の内容においては、「走る」、「歩く」を中心にした移動系の動作が半数を占めており、動きや分類に偏りが見られた。また、資料の内容に含まれている動きが明記されていないものも多く見られた。これは、多くの学生が、「運動遊び」を一つの「運動遊び」として捉えている傾向が強かったために生じたと推測される。そのため、運動遊びに含まれる動き、獲得出来る動きや獲得させたい能力を考慮せず、記入に至らなかったと思われる。これにより、運動遊びの中心となる動きのみが抽出され、大きな偏りをもたらしたものと考えられる。これらのことから、運動遊びを作成するにあたって、学生の運動を「させる側」としての意識が希薄であったことを意味するものと推察される。幼稚園教諭へのアンケートでは、運動遊びにおいて重視している内容として、「一緒に遊ぶ」が最も重視されているとの報告、また、保育園や幼稚園での運動遊びは、自由遊びを中心にする傾向があるとの指摘もある⁶⁾。幼児期の子ども達は、自主的で自由な発想での遊びの中から多くのことを獲得していくことは確かである。また、その中で教職員が「一緒に遊ぶ」ことにより、活動を支援していくことも大切な要素の一つである。しかし、運動遊びにおいては、子どもの発想では限界があることも容易に予想される。幼児期は、多様な動きを行うことで様々な身体的な能力を発達させることが出来る絶好の機会であるからこそ、保育者が「させる側」として意図的に様々な活動を提供することも重要である。

文部科学省は、改訂版の小学校学習指導要領を平成29年3月に公示した。体育においては、小学校1、2年生の内容の「体作りの運動」が「体作りの運動遊び」となり、「遊び」が追加された⁷⁾。これは、幼児期と児童期の連携を強めていくためのものと考えられる。体を動かすことの楽しさを持続的に持ち続けられることは、心身の発達に良好に働くと考えられる。体を動かすことの楽しさは、その活動自体を楽しむことも一つの要素であるものの、「できる」と感じることも大きな要素の一つである。そのためにも、幼児期では、さまざまな「運動遊び」の中から多様な能力を獲得し、次のステップに進ませていくことは重要であると考えられる。今後、学生が保育者を目指すに当たり、遊びの中にどのような動きがあり、それをどのような「運動遊び」として提供することにより、どのような能力が身につくのかを考えることが出来る、すなわち、運動を「させる側」としての力が身につくような指導を検討していく必要がある。

V. 本研究の限界

本研究では、学生が記入した運動遊びの資料を基に運動遊びの傾向を検討した。

運動遊びの内容の抽出においては、筆者のみで行った。このことから、内容から予想される中心的な動きと、資料に明記された内容の動きのみの抽出となった。このことは、記入した学生が意図した動きの全てを抽出できたものではない。また、今回、分析した資料は1回の記入分である。複数回の記入においては、その傾向が異なる可能性は否定できない。さらに、今回の分析において検出されなかった12の動きにも影響を与えるものと推察される。これらのことは、今回の研究での限界となる。

VI. まとめ

本研究では、保育・教職課程所属学生の運動遊びの傾向について、運動遊びの資料を分析することにより明らかにした。

運動遊びの資料を作成するに当たっては、集団での簡単かつ単純な運動遊びを記入する傾向があり、保育現場を想定したと考えられる内容の記入が多い傾向が見られた。これは、保育者としての視点を持ちながら作成した結果と考えられる。

運動遊びに含まれる内容については、「移動系の動き」に偏りが見られるとともに、動きに関する明記がないものが多数見受けられた。これらのことから、運動を「させる側」としての意識が希薄で、運動遊びの意図する部分を熟慮していない傾向が見られた。

参考文献および参考図書

- 1) 運動神経がよくなる本, 中村和彦, 図書印刷株式会社, 東京, 2013
- 2) 富本靖: 幼児期の運動遊び, 自動機の体育が成長に与える影響, 学苑, 920: 52-60, 2017
- 3) 幼児期運動指針, 文部科学省, http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
- 4) 幼児期運動指針ガイドブック 毎日, 楽しく体を動かすために, 文部科学省, サンライフ企画, 東京, 2013
- 5) 平成27年度体力・運動能力調査結果の概要及び報告書について, 体力・運動能力の年次推移の傾向(青少年), スポーツ庁, http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2016/10/11/1377987_002.pdf
- 6) 柳田信也: 幼稚園教師の運動遊びに関する指導理念の調査研究, 研究紀要, 29: 21-26, 2008
- 7) 小学校学習指導要領, 文部科学省, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf, 平成29年3月公示

(提出日 2017年9月30日)